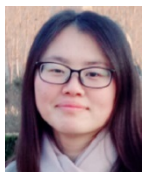


未来日中関係に向けて

大連工業大学 盧芸芬



秋になり、イチョウの葉が金色に輝きながら舞い落ちていました。日中関係もそのように、きらびやかに変わるに違いありません。

「日本の侵略者は 1932 年に早くも奴隷教育のための教科書を書くことを命じました。占領地で親日思想を植え付け、日本文化を大量に紹介しました。その上、中国の伝統文化の内容を歪曲して、締め出しました...」テレビの中の蘇州ニュースが白黒ドキュメンタリーを放送していました。祖母は眉を顰めて、「今、日本語や日本文化を勉強していますか？ほら、ニュースがこう言っていますよ...」と私に言いました。しばらくよく考えて、いろいろなことを思い出しました。当時の日本語の教育は、奴隷教育を行った附属品です。しかし、今はまったく違います。

私達のいる時代は素質教育の時代で、日中友好の架橋になるため、日本語という科目が大学に設置されています。今、私達は自由に簡単に勉強することができます。気持ちも大きく変わりました。

私の周りにいる多くの人々は日中友好のために自分の力をそそいでいます。年齢や、国籍などに関係なく、その気持ちは一番大切なものだと思います。

私の日本の先生はもう 70 歳以上ですが、中国で 6 年間生活したことがあります。相変わらず日中文化の交流の事業に力を尽くしています。白髪で、歩行がよろけていますが、私達に日本語や日本文化や日本歴史などを教えてくれます。私の日本語が少しでも上達すると、いつも励ましてくださいます。

ある授業の時、『愛のハグ』というビデオを見たことがあります。桑原辛一という若い男性が日中友好愛というハグの看板を持って、ハグを通して両国の関係を改善しようと、自分の行動を通して、人々に呼びかけています。「僕はみんなと同じです。兄弟のように、抱きしめて、両国の緊張関係を緩和しましょう」と言って、しっかりとハグしました。留学生の A ちゃんの手をつかんで、ビデオを見ました。私はそのビデオの場面を思い返すと今でも感動せずにはいられません。

若い者であれ、お年寄りであれ、男性であれ、女性であれ、日本人であれ、中国人であれ、日中友好は国境を超えるべきだと思います。日本語を学んだ我々の責任は両国の友好のために自分の力を尽し、努力しなければなりません。

「特別じゃない、英雄じゃない、みんなの上には空がある。雨の日もある、風の日もある。走って、転んで、寝そべって、あたらしい明日が待っている。あした、あさって、しあさって、あたらしい未来がやってくる」と小さく歌いながら、希望と未来への思いを胸に、道のそばのイチョウの葉のような、新しい年に新たな一頁を開けると私は強く信じています。